

2024/25 年ミュンヘン安全保障会議

J・D・ヴァンス米副大統領発言 (v1.1)

2025/02/15

山形浩生訳 (hiyori13@alum.mit.edu)

Executive Summary

ヴァンス米副大統領の、2025年ミュンヘン安全保障会議での演説。ヨーロッパの防衛では欧州自身が主体的な役割を果たすべきだが、それ以上に外部の脅威よりも、民主的価値観の後退というヨーロッパ内部の問題を懸念。そんな状態ではまともな同盟はおぼつかないと指摘。特に、言論の自由の制限や政府の検閲、選挙の無効化などの動きを批判した。欧米が共有する価値観を守るために、自由な言論や異なる意見の尊重が不可欠であり、特に移民問題が大きく、エリートが国民の声を踏みにじるようではダメだと戒めた。

関連して2024年のパネルディスカッションでは以下の点を述べた：

1. **ウクライナ支援の限界** - 資金ではなく兵器生産がボトルネック。西側はロシアほどの兵器生産能力がない。
2. **和平交渉の必要性** - 武器供給が限られている以上、ウクライナ戦争は交渉による解決しかない。
3. **アメリカの外交優先順位** - ロシアは脅威だが、アメリカが重視するのは東アジア。
4. **ヨーロッパの安全保障の自立** - アメリカは東アジアに注力するからヨーロッパは自分で防衛能力を強化せよ。
5. **脱工業化のリスク** - 戦争で重要なのはGDPより工業生産力。ヨーロッパは自国の安全保障強化のためにも工業を維持せよ。

目次

2025年2月 ミュンヘン安全保障会議でのヴァンス演説 2

パネルディスカッションでのヴァンス発言 9

1. 2025 年 2 月 ミュンヘン安全保障会議でのヴァンス演説

(注：書き起こしは以下から取ったが YouTube に上がっている実際の演説を聴いても遺漏はない。

<https://thespectator.com/topic/read-jd-vance-full-speech-decay-europe/>)

(冒頭の各種謝辞は省略) 今日お話ししたいことの一つは、もちろん、我々の共通の価値観についてです。そしてちなみに、ドイツに戻ってこられたのはとても嬉しい。さっき出ましたが、私は昨年、米国上院議員としてここにきました。外務大臣のデイビッド・ラミーに会ったとき、昨年は二人とも今とは違う仕事だったな、と冗談を交わしましたよ。しかし今は、ここにいる国すべて、それぞれの国民から政治権力を与えられる幸運に恵まれた我々全員が、その権力を賢く使って人々の生活を向上させる時です。

そして、過去 24 時間にわたり、この会議以外の場所で時間を過ごすことができたのは幸運でした。昨日の恐ろしい攻撃でみなさんが動揺しているのに、それでも歓迎してくれた人々にはとても感銘を受けました。初めてミュンヘンを訪れたのは、実は今日私と一緒にいる妻との個人的な旅行でした。私はずっとミュンヘンの街が好きだったし、ミュンヘンの人々も大好きなんです。

言っておくと、私たちは非常に心を痛めているし、ミュンヘンと、この美しいコミュニティにふりかかった邪悪の被害者すべてのために、懸念と祈りを捧げたいし、来る日々、来る何週間も、皆さんをまちがいなく応援し続けます。

(訳注：この演説のほぼ当日に、ミュンヘンで難民申請中のアフガン移民が車でデモ隊に突っ込んで数十人を負傷させたテロ事件のことを指している)

さてもちろん、この会議に我々が集まったのは安全保障の議論のためです。通常これは、外部からの安全保障に対する脅威ということです。今日ここには、実にたくさんの偉大な軍事指導者たちが集まっているのが見えます。しかしトランプ政権はヨーロッパの安全保障を大いに懸念していて、ロシアとウクライナの間でそれなりの調停が実現できると信じていますし、さらにこれからはヨーロッパが自分たち自身の防衛を支えるために、大幅に踏み出すことが重要だとも信じていますが、私がヨーロッパについて最も心配しているのは、ロシアでもない、中国でもない、どんな外部アクターでもない。私が心配しているのは、内部

からの脅威です。ヨーロッパが、その最も根本的な価値観から後退しているということなんです。アメリカ合州国と共有している価値観からの後退です。

私が驚いたのは、元欧州委員会の委員が最近テレビに出て、ルーマニア政府が選挙を丸ごと向こうにしたことについて、喜んでみせていたことです。そして、もし事態が計画通りに進まないなら、同じことがドイツでも起こるかも、と警告しました。

(訳注：2024年にルーマニア憲法法廷が、大統領選第一次投票が外国の介入で歪んで右派のジョルジュ・スク候補が優位だったのを無効にした話。これに対して元欧州委員のティエリー・ブレトンがそれを歓迎する発言をした)

さて、こんな発言が平然と行われるのは、アメリカ人にとってはショッキングなことです。長年にわたり、アメリカは自分たちが資金を出して支援してきたものすべては、私たちが共有している民主的価値観のためなのだと聞かされてきました。ウクライナ政策からデジタル検閲まで、なんでもかんでも民主主義の擁護だという看板で行われてきました。しかしヨーロッパの法廷が占拠をキャンセルしたり、上級高官が他の選挙もキャンセルするぞと脅したりするのを目にしたら、自分たちが適切なほど高い基準を自らに課しているのか、自問すべきです。いま、自分たちと申しあげました。それは私たちが同じ側に立っていると、私が心から信じているからです。

民主的価値観について、口先で語るだけはいけません。それを生きねばならないのです。さてこの部屋にいらっしゃるみなさんの生の記憶の中でも、冷戦はこの大陸で、民主主義の擁護者たちをずっと圧政的な勢力と対決するように位置づけました。そしてその戦いにおいて、異論のある者たちを検閲し、教会を閉鎖し、選挙をキャンセルしたのはどっちだったかを考えましょう。そいつらは善玉だったのでしょうか？ 絶対ちがいます。

そして、そいつらが冷戦に負けたのを神に感謝しましょう。連中が負けたのは、自由の驚異的な恵みすべてを重視もしなければ尊重もしなかったからです。それは驚く自由、まちがえる自由、発明し、作る自由です。意外かもしれませんが、イノベーションや創造性を義務づけたりはできないんですよ。人々に何を考え、何を感じ、何を信じるかを強制できないのと同じです。そして私たちは、そういうものがまちがいなくつながっていると信じます。そして残念ながら、今日のヨーロッパを見るにつけ、ときには冷戦の勝者たちの一部に何が起きたのか、よくわからなくなってしまう。

ブリュッセルを見ると、EU委員会の統制委員^{コミッショナー}どもが市民たちに、社会不安が起きたらソ

ーシャルメディアを閉鎖させるつもりだと警告しています。その社会不安というのは、その連中が「ヘイト的なコンテンツ」だと判断したのを見つけたらすぐに、ということです。あるいはこのドイツそのものでも、警察がオンラインで反フェミニスト的なコメントを投稿したという容疑で、市民にガサ入れをかけたります。インターネット上の「ミソジニーと戦う」一環として、というのがその口実です。

スウェーデンを見ると、二週間前に、政府はキリスト教活動家をコーラン燃やしに参加したとして起訴しました。その活動のため、彼の友人が殺されたんです。そして彼の裁判の判事は、ゾツとする話ですがこう述べました。スウェーデンの、方言の自由を保護すると称する法律は、実は、その信仰を持つ集団のご機嫌を損ねることなしに、なんでもやったり言ったりする「フリーパス」——これは直接の引用です——を与えるものではない、と。

そして最も懸念すべきことかもしれませんが、我がアメリカのまさにきわめて親愛なる友邦、イギリスを見ましょう。そこでは意識についての権利からの後退で、特に宗教的なイギリス人たちの基本的な自由が狙い撃ちされるようになっていきます。二年少々前に、イギリス政府はアダム・スミス・コナーを起訴しました。この51歳の整体師で退役軍人は、中絶クリニックから50メートルのところのところで断って、三分にわたり黙って祈ったという恐ろしい罪のために捕まったんです。だれも邪魔せず、だれとも口をきかず、ただだまって一人で祈っていただけです。イギリスの警察が彼を見つけて、何のために祈っているのか言えと要求したら、アダムは単純に、自分は生まれぬ息子のために祈っているのだ、と言いました。彼とその元ガールフレンドは、ずっと前に中絶していたんです。

警官たちは心動かされたりしませんでした。彼は政府の新しいバッファゾーン法に違反したことで有罪とされました。これは中絶施設から200メートル以内で、人の決断を左右しかねない黙祷などの行動を犯罪にするものです。検察に対して彼は、訴訟費用として何千ポンドも支払うように判決を受けました。

さて、こんなのは凡ミスで、ダメに書かれた法律がたった一人に適用された、一回限りのトンデモ事例だと言えたらよかったです。でも、ちがうですよ。この10月、ほんの数ヶ月前ですよ、スコットランド政府は、そのセーフアクセスゾーンと称する範囲に家がある市民たちに手紙を送りつけて、自宅内の詩的なお祈りですら、この法律違反になりかねないぞと警告したんです。当然ながら、政府はその読者に対し、イギリスやヨーロッパでこの思考犯罪を犯した疑いのある同胞たちを通報するよう奨励したんです。

言論の自由は、どうも後退しているんじゃないでしょうか。それも笑える話だけじゃあり

ませんよ、友人諸君、真実に関連した部分でも後退しているんです。はい、認めましょう。検閲を支持する最も大きな声は、ときにはヨーロッパの内部からではなく、私自身の国アメリカからきています。前政権はソーシャルメディア企業を脅して、誤情報なるものを検閲するようにゴリ押ししました。その誤情報というのはたとえば、コロナウィルスが中国の研究所から漏れた可能性が高い、といったものです。私自身の政府、アメリカ政府が民間企業に対し、この明らかな事実だったものを敢えて口にした人々を黙らせるよう奨励したんです。

だから本日私がここに来たのは、見立てを提供するためだけではありません。取引を申し出たいんです。そしてバイデン政権が、自分の思ったことを述べた人々を必死で黙らせたのに対して、トランプ政権はまさに正反対のことをしたいし、私たちがその点で協力できればと思うんです。

ワシントンには、新しい保安官が来ましたぜ。そしてドナルド・トランプの指導の下で、私たちはあなたたちといろいろ物の見方がちがうかもしれませんが、あなたがたが自分の意見を公開の場で擁護する権利のためには戦いましょう。その意見に賛成だろうと反対だろうと。さてもちろん、いまや状況はあまりに悪化しすぎて、この12月にルーマニアは、いい加減な諜報機関からの疑念と、大陸の隣国からのすさまじい圧力に基づいて大統領選の結果をあっさりキャンセルしてしまいました。私が理解するところでは、ロシアの誤情報がルーマニアの選挙に感染したというのがその主張でした。しかし、私としてはヨーロッパの友人たちに、ちょっと視野を広げてくれと言いたい。ロシアがソーシャルメディアの高校区を買って選挙に影響を及ぼすのはいけないことだと信じてもいいでしょう。私たちがそう思いますよ。それを世界の舞台で糾弾することだってできますよ。でもね、あなたの民主主義が、外国からの数十万ドルの広告で破壊されるようなものなら、そもそも大して強い民主主義じゃなかったのでは？

さてよい報せです。私は実は、あなたたちの民主主義は多くの人がどうも信じているよりも、ずっと脆くないものだと思っているんです。

そして、市民に言いたいことを言わせるのは、それをさらに強化すると本気で信じています。ということで、話はミュンヘンに戻ってきます。この会議の主催者たち自らが、左派と右派両方のポピュリスト政党からの代議士に、こうした会話への参加を禁止しました。さて繰り返しますが、そういう人たちの言うことのどれか、いやどれ一つとして、別に私たちが同意する必要はない。でも政治指導者が重要な有権者層を代表しているなら、少なくともその人々との対話に参加するのは私たちの責務なのです。

さて、大西洋の反対側にいる私たちの多くから見ると、これはますます、誤情報だの歪曲情報だのといった薄汚いソヴィエト時代の用語の背後に、古い既得権益が隠れているだけのようにしか見えないんです。そういう既得権益者は、別の見方を持った人が、別の意見を述べるとか、あるいは神も恐れず別の形で投票するとか、もっと酷いことに選挙で勝っちゃうなんて、とにかく許せないだけだというふうに見えるんです。

さて、ここは安全保障会議ですし、みんなご自分たちが今後数年で、何か新しい目標と沿うように、どんなふうに防衛支出を増やすつもりなのか、話すつもりでいらしたんでしょうね。大いに結構、というのもトランプ大統領がこれ以上ないほど明言したように、彼はヨーロッパの友邦が、この大陸でもっと大きな役割を果たすべきだと信じているからです。みなさんは「負担の共有」ということばはなじみがないかもしれませんが、私たちは共通の同盟仲間であるためには、アメリカが世界の中で大きな危険に曝されているところに専念する一方で、ヨーロッパ人がもっと前に出てきてくれるというのが重要な一部だと思うんです。

しかしもう一つお尋ねしたい。この種の予算問題なんて、そもそも何を守るかも分かっていないようなら、どうやって考え抜く出発点にすら立てるんでしょうか？ すでに話をする中でいろんなことは聞いたし、この部屋にお集まりの多くの人々と、実に多くのすばらしい会話をしてきました。あなたたちが、何から自分たちを守りたいかについてはいろいろ聞かされましたし、それはもちろん大切なことです。しかしそれほどはっきりしないように私には思えたことし、そしてヨーロッパ市民の多くもまちがいなくそう思っているでしょうが、ズバリ何のために自分たちを守っているのか、ということなんです。私たちみんながこれほど重要だと信じている、この共有安全保障盟約を動かす、ポジティブなビジョンというのは何なのでしょう？

私は心の底から、自分自身の国民たちの声、意見、それを導く良心を恐れていたら安全保障はあり得ないと信じています。ヨーロッパは多くの課題に直面しています。しかしこの大陸が直面する危機、私たちが共に直面していると私が信じる危機は、自業自得なんです。自分の有権者を怖がって逃げ回るようなら、アメリカは何もしてあげられません。それを言うなら、私やトランプ大統領を選んだアメリカ国民のためにあなたたちができることも、何一つないんです。これからの年月でまともな価値あることを実現するためには、民主的な信任(mandate)が必要なんです。

薄っぺらい信任は不安定な結果しか生まないということ、私たちは忘れてしまったのでしょうか？ しかし自国民たちの声にもっと応えるようにすることで得られる民主的な

信任があれば、実に多くの有意義なことが実現できると思います。競争力のある経済を享受したいなら、手ごろなエネルギーや安定したサプライチェーンを享受したいなら、それを司る信任が必要です。というのもそうしたものをいろいろ享受するには、つらい選択も必要になるのですから。

そしてもちろん、私たちはそれを熟知しています。アメリカでは、民主的な信任を勝ち取るためには、政敵を検閲したり投獄したりはできません。それが反対政党の党首だろうと、自宅で祈る慎ましいキリスト教徒だろうと、ニュースを報じようとするジャーナリストだろうと。また、基本的な有権者たちの質問を無視してそれを勝ち取ることもできません。たとえば、だれが共有社会の一員になれるのか、といった質問です。

そしてここで代表されている各国民が直面する各種の重要問題の中で、大量移民ほど喫急のものはないと私は信じています。今日、このドイツに暮らす五人に一人は外国からの移住者です。もちろんこれは空前の高さです。ちなみに、アメリカでも似たような数字で、これもまた空前の高さです。2021年から2022年にかけてだけでも、EUへ非EU国に入った移民の数は倍増しています。そしてもちろん、その後これは高まる一方です。

そして状況はもうご存じですよ。パッと湧いて出たものじゃない。この大陸全土の、世界中の政治家たちが十年がかりで行った、一連の意識的な決定の結果なんです。こうした決定がもたらした恐怖は、まさにこのミュンヘンで昨日目撃したばかりです。そしてもちろん、それを考えるとミュンヘンでの美しい冬の一日が台無しになった、悲惨な被害者たちのことを考えずにはいられません。懸念と祈りを、いまもこれからも捧げ続けたい。だがそもそも、なぜそんなことが起こったりしたのでしょうか？

ひどい話ですが、ヨーロッパではあまりに多く耳にしたことだし、残念ながらアメリカでも多すぎる事なんです。難民申請者、しばしば二〇代半ばの若者で、すでに警察に目をつけられていた人物が、群集に車で突っ込んで、コミュニティを崩壊させます。国民の連帯を崩壊させたんです。こういう啞然とするような後退で何度苦渋を舐めたら、私たちは道筋を変えて、共通の文明を新しい方向に向かわせられるのでしょうか？ この大陸で、何百万もの何の身元保証もない移民の洪水に門戸を開くよう選挙で支持した人間はいません。でも有権者が何を支持したかご存じですか？ イギリスではブレグジットを支持しました。そしてそれに賛成か反対かはさておき、有権者はそれを支持したんです。そしてますますヨーロッパ全土で、人々は収拾がつかなくなった移民を終わらせると約束する政治指導者に投票しています。さて、私はたまたまそうした懸念の多くに同意する者ですが、別にあなた方が

私に同意してくれる必要はないんですよ。

ただ、人々は自分の家のことを気に掛けるとは思います。自分の夢を気に掛けます。自分の安全と、自分や子供の生計をたてる能力は気に掛けます。

そして彼らはバカじゃない。これは私が政治にかかわった短い期間で学んだ最も重要なことのひとつだと思います。山をいくつか隔てたダボスで耳にする話とはちがって、私たちのすべての国の国民は、自分のことを教育を受けた家畜だとか、グローバル経済の交換可能な歯車だとか思ったりはしていないんです。そしてあちこち追い立てられたり、指導者に無視されたりしたくないのも、まったく意外でもなんでもありません。そしてそうした大きな問題を投票箱で差配するというのが、民主主義の仕事なんです。

私は、人々を無視すること、人々の懸念を無視すること、いやもっとひどいこととして、メディアを潰し、選挙を潰し、人々を政治プロセスから閉め出すことは、何も守らないと信じています。それどころか、それは民主主義を破壊する最も確実な方法です。口を開いて意見を述べるのは、選挙介入なんかじゃない。その人々が自分の国の外で意見を述べたり、そういう人々がすごく影響力を持つ場合ですら——そして信じてくださいよ、これは完全にジョークですからね——アメリカの民主主義が、グレッタ・トンベリのお説教に十年耐えられたんだから、あなたたちの民主主義だってイーロン・マスクの数ヶ月ほどで死にやしませんって。

しかしあらゆる民主主義、アメリカだろうとドイツだろうとヨーロッパだろうと死んでしまうやり方があります。それは何百万もの有権者たちに、おまえたちの考えや懸念、野心、救済の訴えなど、無効だとか無価値だとか、そもそも考慮にすら値しないと告げることで

民主主義は、人々の声が重要だという聖なる原則に基づいています。ファイアーウォールの余地はありません。この原則は、従うかそうでないかのどちらかです。ヨーロッパ人、人々には声があります。ヨーロッパの指導者たちは選択肢があります。そして私の強い信念は、私たちは未来を恐れる必要などない、というものです。

人々がみなさんに告げることを受け入れましょう、それがびっくりするようなことでも、みなさんが同意できないことであっても。それができてはじめて、確信と自信をもって未来に直面できるのです。国民がみなさん一人一人の背後についているとわかるから。そして私にとっては、それが民主主義の大いなる魔法です。それは、こんな石造建築だの美しいホテ

ルだのにあるものじゃない。共通の社会として私たちがいっしょに作り上げてきた、偉大な制度機関の中にあるものでさえないんです。

民主主義を信じるというのは、市民の一人一人が叡智と声を持つと信じることです。そしてその声に耳を傾けるのを拒むなら、戦いでどんなに成功しても、保障される安全などないも同然です。この大陸だろうと他のどこだろうと、最も傑出した民主主義支持者であるヨハネ・パウロ二世教皇がかつて述べたように「恐れてはいけない」。国民を恐れてはいけません、彼らとその指導層とちがった見解を述べるときですら。ご静聴ありがとうございます。みなさんにご幸運をお祈りします。神の祝福を。

2. 2024年2月パネルディスカッションでのヴァンス発言

書き起こしは以下から得たが、YouTube に上がっているビデオを聞いてもこの書き起こしに不備はない。小見出しは後付で、そのときのパネルで出た質問の要約。
<https://www.americanrhetoric.com/speeches/jdvancemunichsecurityconference2024.htm>

ウクライナ支援のボトルネックは、お金ではなく軍事生産

同席できて光栄です。で——私としては——私はドナルド・トランプを代弁はできません。自分の意見は言えます——そして大統領も私の言うことに同意はすると思いますが、アメリカの元大統領や将来大統領になりそうな人の代弁もできませんからね。

で、まずはあれやこれやと言われてはいますし、私的公的な会合でもいろいろ聞かされてはきましたが、ドナルド・トランプはロシアを抑止するのにこの世代で最高の大統領だっただろうということは忘れちゃいけません。

実際、過去20年でロシアが外国を侵略しなかった唯一の時期は、ドナルド・トランプが大統領だった四年間です。そして実に多くの方は、トランプや私や、その他の人々がプーチンのポチだと糾弾しますが、おもしろいことにドナルド・トランプが——じゃないや——ウラジーミル・プーチンが次の大統領になってほしいと言ったのは、ドナルド・トランプでは

なかったんですよ。ジョー・バイデンのほうが望ましい候補だと言ったんです。先が読めるからって。

さてヨーロッパの安全保障の問題ですが、ここにはヨーロッパが本当に目を覚ますべき根本的な問題があると思います。そして私は——これは友情の精神で述べることであって、批判じゃありません。というのも私はアメリカが NATO から脱退すべきだとは思わないし、ヨーロッパを見捨てるべきだとも思ってませんから。でも、方向転換はすべきだと思っています。アメリカは東アジアにもっと注力しなくてはならない。それが今後 40 年のアメリカの外交政策になるし、ヨーロッパはその事実を目を覚ますべきなんです。

さてまずいくつか事実を提示しましょう。第一に、アメリカから見たウクライナ問題。そして——そして私はアメリカの世論の大半を代表しているとは思いますが、このミュンヘン会議にくる上院議員たちの大半とは意見がちがいますが、私の意見は、はっきりした終わりが見えないというものです。そしてアメリカ支援の根本的な制約要因は、お金ではなく、弾薬なんです。アメリカは、ちなみにこれはヨーロッパにも当てはまりますが、東欧と中東と、東アジアでの潜在的な紛争を支援できるだけの弾薬が作れない。だからアメリカは根本的に制約されているんです。

さていくつかすごく——ものすごく具体的な細部を挙げましょう。PAC-3、つまりパトリオット迎撃ミサイルですが、ウクライナは一ヶ月でアメリカの年間生産量を使い果たします。ね？ パトリオットミサイルシステムは、5 年分のバックオーダーが積み上がっています。155 ミリ砲弾は 5 年以上のバックオーダーです。アメリカ国内では 2025 年末までに弾薬生産量を月産 10 万に強化する話をしています。ロシアはいまこの瞬間に月産 50 万近い。だからここでのウクライナ関連の問題は、アメリカが十分に武器を作れないということなんです。ヨーロッパだって十分に作れない。そしてこの現実は、アメリカの政治的意思は、どれだけお金を刷ってヨーロッパに送れるかという問題より遥かに重要なんです。

そして——お答えする最後の論点ですが、というのも私も……えー、トランプの発言を聞いたのはわかっているし、ねえ、それを批判して「ふん、トランプはヨーロッパを見捨てるんだ」とか言ってますよね。私は、それは全然まちがっていると思います。トランプは実際には、目を覚ませといってるんです。ヨーロッパが自分たちの安全保障でもっと大きな役割を果たさなければと言っているんです。ドイツは今年、GDP の 2% 以上を支出します。もちろんそれは、アメリカでは本当になんか実現できないことで、やっとそのしきい値を超えたところなんです。

しかし、話は支出額だけじゃない。ドイツは今すぐに、機甲旅団をいくつ船上に投入できますか？ 一つですかね。一つかな。ね？ ヨーロッパの問題は、自前で十分な抑止を提供しないということなんですよ、それはヨーロッパが自前では十分な——自分の安全保障について自らイニシアチブを取らないからなんです。アメリカの安全保障の傘のおかげで、ヨーロッパの安全保障は衰退したと思うんです。

繰り返しますが、これはアメリカがヨーロッパを見捨てたいということじゃない。言いたいのは、アメリカは国として東アジアに注力する必要があるし、ヨーロッパではヨーロッパの同盟国にもっと頑張ってもらいたいということなんです。私は——ありがたかったのは——こちらのイギリスの友人 [デヴィッド・ラミー] が言ったことです。そしてもちろん、イギリスは数少ない例外の一つで、過去一世代にわたりきわめて有能な軍を戦場に投入してくれました。しかしそれはヨーロッパの他の国については言えません。それは変えてもらわないと。

ウクライナ戦争では和平交渉が必要

プーチンがヨーロッパの生死に関わる脅威だという考えと、同盟国に GDP の 2% を防衛費に使わせようとしているという考えを並べると、かなり厳しい。この両者はかなりの緊張関係にある。私はウラジーミル・プーチンがヨーロッパの生死に関わる脅威とは思わないが、脅威である限り、ヨーロッパは自分たちの安全保障にもっと強い役割を果たすべきだということになる。

これが——これが第一。しかし——しかし改めて「ウクライナを見捨てる」という問題に話を戻すこととなります。もし議会でいま審議されているパッケージ、ウクライナへの 610 億ドル補助支援が可決しても、正直言って、それが戦場の現実を根本的に変えたりはしないんだ。いまウクライナに送れる弾薬の量はきわめて限られている——繰り返しますが、アメリカの意思がないとかアメリカがケチだとかいうせいではなく、アメリカの製造能力のせいです。さっき強調したバックオーダー、これは将来の問題じゃない。いまこの問題だし、それが本当の制約になっている。

だから私が言ってるのは、こういう現実の制約がある中で、ウクライナでの現実的な成果って何だ、ということです。今後 18 ヶ月も、過去 18 ヶ月に送ったような兵器を送れるのか？ 端的に無理です。アメリカ議会がどれだけ小切手を切っても、その物理的な制約があ

る、わかりますか？ 弾薬は——弾薬は戦争では大きな問題です。まだ語っていないこととしては、もちろん、兵力も戦争では重要だということで、ウクライナ人がその面できわめて限られているのも分かっていますよね。

だから私たちの議論、少なくともここでの私の主張は、こういう直面する現実、弾薬と兵力のきわめて実物的な制約を前にして、現実的に何が達成できると考えるべきで、それを具体的にいつ達成できると考えるのか、ということなんです。そして私の主張としては、なあ、現実的に達成できるのは、何らかの交渉による和平だろうということなんです。ウクライナ、ヨーロッパ、米国は、交渉の席につくインセンティブがあると思う。それを実現させよう。これは交渉による和平で終わる。問題は、それが交渉して終わるのはいつで、それがどんな条件のものになるかということです。

敵との対決におけるアメリカ利害の優先について

まずはじめに、私は AUKUS（英米豪安全保障パートナーシップ）のファンです。そしてナワリヌイの死についていえば、いや彼は明らかに勇敢な人物です。その死は悲劇です。彼が投獄される理由はなかったと思う。獄中で殺されるべきではなかったと思う。それをやったプーチンは非難する。

しかし問題は、それで別にプーチンについて何か新しいことがわかるわけじゃないんです。

プーチンが親切で優しい人物だなんて言ったことは一度もない。彼は独特な利害を持つ人物で、アメリカはその独特な利害の人物に対応しなくてはならないと論じた。彼と考えを同じくする必要なんかない。そんな必要はない——それを非難できるし、実際そうすることも多い。が……あいつが悪者だからといって、基本的な外交や優先順位づけができないということにはならない。世界中に悪い奴はたくさんいるし、私としてはヨーロッパよりは東アジアの問題の一部のほうに関心があるんです。

西側の武器製造能力、脱工業化によるリスク、GDP などの指標では国の軍事力が測れないこと

さて、前に出た質問らしきものの一つに答えましょう。というのは、『ヘリテージ 2025』

についての質問です。私は——それが NATO について何を言っているかは漠然とは知っていますし、それがここで私の主張してきたことと整合しているのも知っています。ヨーロッパは安全保障でもっと大きな役割を果たせということですね。そしてそれは、ヨーロッパなんかどうでもいいと思ってるからじゃない……自分たちが希少性の世界に暮らしているということを認識する必要があるからです。

この手の質問を聞いたり、これまでの私的な会話の実に多くを聞いたりしていると、ミューンヘン安全保障会議でやたらに支配的だと思う態度の一つが、アメリカ超大国はあらゆることを同時にこなせるといものなんです。そして私が言っているのは、ここは希少性の世界であり、アメリカの武器製造能力や決定的な戦争装置の製造能力があって、希少性の世界なんだから、私としてはみんなに目を覚ましてほしいんですよ。その希少性の世界では、ウクライナと中東と東アジアの有事には対応できない。まったく筋が通らない。兵器製造の点で計算が合わないんです。

それと——一つ最後に行っておきたいのは、この部屋でいろいろ自己満足げな自画自賛が聞こえてくるし、故郷アメリカでもそういう会話はありましたから、これはヨーロッパだけの批判ではなく、うちの GDP はロシアよりこんなにでかいぞ、という話でした。はいはい、うちらはロシアよりは豊かです。うちの国民は平均的なロシア国民よりいい生活をしています。それは確かに祝って誇るべきことです。

しかし戦争は GDP やユーロやドルで勝つものじゃない。兵器で勝つんだし、西側は十分に兵器を作っていない。さて私は——別にドイツ叩きをしたいわけじゃなくて、ドイツは大好きなんですが、ラングさん [ドイツの女性国会議員] がさっき言ったことに答えましょう。ねえ、ドイツは NATO の中で、あのバカげたワシントン・コンセンサスにしたがわず、70年代、80年代、90年代に国を脱工業化に任せなかった唯一の国ですよ。それなのに、まさにプーチンがどんだん強くなったその瞬間、ロシア軍がヨーロッパ諸国をどかどか侵略しているときに、まさにそのときになんでドイツは脱工業化なんか始めるんですか？

ドイツの製造業就業者数を十年前と比べてみなさいよ。ドイツでの重要原材料生産の水準は十年前と比べてどうですか。脱工業化はやめないと、ヨーロッパには成功してほしいですよ。でもヨーロッパは自分たちの安全保障にもっと大きな役割を果たさないといけないし、工業なしにそれは無理なんです。

Version History

V1.0 2025.02.12 13:00 バージョン 1 公開

V1.1 17:00 後半のシンボが 2024 年であることを明記